

---

# 仮面ライダーブレイヴ

みやびわたる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーブレイヴ

### 【Zコード】

N8010X

### 【作者名】

みやびわたる

### 【あらすじ】

“感情”。それは如何なる状況においても、人類の歴史と密接に関係している。ある日、感情に反応するという未知の鉱物『フイーリウム』が発見された事で、平凡な日々に大きな変化が生まれた。しかしそれが、数多の人々の運命を変えてしまう闘いの引き金になると、誰も予想していなかつた。様々な欲望や願いが交差する日々に現れた仮面の戦士、ブレイヴ。勇気の化身は正義と悪が入り交じる世界で、自らの信念を貫けるのか。

## 序章・PROLOGUE～業火と青年～（前書き）

はじめまして。みやびわたると申します。はじめての執筆なので、かなりグダグダになると想いますが、読んで頂けると嬉しいです。

## 序章・PROLOGUE「業火と青年」

その日はいつもと様子が違っていた。曇り空が紅蓮に照らされている。町外れに建てられた巨大な研究所が爆炎をあげながら燃えているのだ。科学薬品や精密機器が大量に置いてあるせいか、火の勢いは止まるどころか逆に強くなっていく。

そんな地獄と化した敷地の中を、1人の青年が息を切らしながら走つていた。

「……………ハア、ハア……ハア…………」

服装から察するに高校生のようだが、服が所々焼け焦げていたり無数の切傷があつたりとボロボロである。

「……………ハア……ハア……、もうすぐ……出られるぞ…………」

手に持つている物としたら学生鞄、そして黒と藍色の無骨な機械ぐらいいだ。携帯もあるが場所が場所だ。電話なんてこの火の海の中では何の役にも立たない。それにこれだけの大火灾だ。既にほとんど人が気付いている筈。それなのに誰も来ないということは、近付けないくらいの被害だという事。助けは来ない。だったらひたすら走つて此処を出る。それが今の彼が考えられる最善の策だ。

しばらく走っていると、150㍍くらい先に正門が見えてきた。「よし、もう少しだ」と青年が思ったその時、

“ヤツ”はそこにいた。

正門と青年の間に入るよう，“そいつ”は此方を睨んでいた。人ではない。鎧のような物を纏つて2本足で立つてはいるが、人とは似ても似つかない姿をしている。

『グブルルルル……！』

異形はどす太い唸り声をあげる。明らかに敵意があるようだ。気の弱い人がそんな光景を見たなら、あまりの恐怖で動けなくなってしまうだろう。

「……」

だが青年は、落ち着いていた。じつと異形を見据え、静かに呟く。

「…………どうやらアナタは、さつきの怪物と同種みたいですね」

彼は手に持っていたパンチングとした機械を右腰に当たがう。すると

機械から帯が飛び出し腰の周りを一周すると、カチャツといつ音と共に機械にはまり無骨な形状を安定させる。

「…………僕には……やけにやならなこことがある。…………こんなとこで死ぬ訳にはいかない。…………そ」「…………通してもらいますよ」

独り言のようにボソボソと呟いた後、懐から取り出したメモリーカードのような物を、機械の側面にあるスロットに差し込む。

〔ゼントル……スタンバイ〕

機械から電子音声が流れ、対峙した両者が構える。そして青年は静かに言った。

「たとえ孤独でも、僕は闘う。皆を……護るために。……変身」

〔ゼントル……セットアップ〕

それは、目の前にいる敵に対して、未来で待ち受ける運命に対して、そして自分の心に対しても突き付けた、自らの覚悟を意味する言葉だった。

## 序章・PROLOGUE～業火と青年～（後書き）

改めまして、はじめまして。みやびわたるです。僕のつたない駄文を読んで頂き、……………つつありがとうございますm(—\_—)m !!!!!それにしても、小説って文章だけで情景を表現しなきゃいけないから、思った以上に難しいですね……。感想でアドバイスとかいろいろ指摘して頂けると幸いです。更新時期については、ペースを掴めるまでバラバラになってしまふと思います。ご了承下さい。それでは、これからよろしくお願ひします!!

## 第1話・BEGINNING～科学者とフリーター～（前書き）

どうも、みやびわたるです。第1話、書き上げました。5000字  
つて結構な量行くんですね（-〇-）。10000超える人はす  
ごいなあ…。では、スタートです！…

## 第1話・BEGINNING～科学者とフローティング～

初夏、草木も青々と茂つてきている。気温も日々に上がりついで、夕方になつていても関わらず、体感温度は確実に高くなつていいく。

「…………あ、ああ……暑い…………」

「もうひ、そんな今にも死にそうつな声出やないでよ~。びっくりしちゃつたじやん」

2人の若い男女が会話しながら、繁華街を歩いている。

「んな事言つたつてよ……。このところ毎日ピソンカン晴れだぜ? 鈴奈、お前よく平氣でいらっしゃるなあ?」

所々くせ毛で、赤毛の混じつた黒髪の青年、ねがはねじゅう笙原翔がダルそうな顔で答えた。

「翔ちゃんが暑がりすぎなの。まだ夏にもなつてないんだし……、周り見てもダルダル~つてしてる人は翔ちゃんぐらいです!~」

セリフロングの黒髪の女性、旭鈴奈はキッパリと言つ切る。

「へへへい、可愛くなる為とか言つてゐ鈴奈だつたら、暑さなんか気になりませんもんないな~」

「へへか……かわ……かわい?……ええと、えと……そ……そんなん……」

鈴奈は翔の言葉に激しく動搖した。鈴奈と翔は幼稚園からの幼なじみ。互いの両親も仲が良かつた事もあってほとんどの時間を家族のように一緒に過ごしてきた。そうしている内に、鈴奈はいつの間にか翔に恋愛感情を抱くようになっていたのだ。

そんな彼女は顔を真っ赤にしてモジモジと下を向いてしまつ。翔本人は皮肉で言つたつもりなのだが……。

「ん？ 鈴奈、どうした？ 顔赤いけど、大丈夫？」

「…………あつ、え…こや、これは…えとお…………そのお…」

翔は鈴奈の変化に気付き、屈んで鈴奈の顔を覗き込む。急に覗き込まれたことで鈴奈の焦りは最高潮になつてしまつ。翔はそんな彼女を見て、

「…………なるほど。そうだったのか」

と何かを察したような顔をしている。鈴奈が「一体何が解ったんだらうへへ、まさか……」とドキドキしてくると、

「…………鈴奈、…………やつぱりお前も暑いんじゃんー暑いなら暑いつてもう言えばいいこのことよお……。」

「…………え？」

翔の見当外れな言葉に鈴奈は唖然としてしまつ。

「ハア……。オレには暑がりとかダルダルとか言つておいて、自分で変わんないじゃんかよ）。ホントに大丈夫？あんまり我慢しちゃダメだぜ？」

「…………うううん。『めん…………』

鈴奈は翔が心配してくれる事に感謝しながら、内心複雑な気持ちだった。翔が恋愛とかの類いに対しても、子供の頃からあんまり変わっていない。デートに行つても、プレゼントをあげても、翔は彼女の気持ちにはまったく気付いていない。鈴奈とは家族のような関係だと思っているから尚更なのだが、此処まで度を超える疎さを持つ、恋愛の「れ」の字も知らない男を見ていて、鈴奈は焦りや不安を感じているのだ。

「でも、鈴奈にはオレの就活に付き合つてもらつた訳だし、それで体調崩されちゃつたら鈴奈の母さん達に申し訳ないしな……。ありがとな」

しかし性格はとても優しく、こぞとこう時は頼りになる。そんな彼の人柄に、鈴奈は惹かれているのだ。

「ううん、あたしは平氣だよ。それより、今回の面接はどうだったの？」

「…………今回も多分ダメだろうなあ。何社も受けてるとわかるんだよ。落ちる時の面接官の顔とか、声の感じとかでさ……くそつ、

この状態で1年経つよ……」

高校卒業後は完全に独り立ちさせる、という笠原家の教育方針に従つて翔は家を出た。しかし部屋を借りるお金もなかつた為、鈴奈の叔母、旭奈津子<sup>あさひなつこ</sup>が営んでいる喫茶店の2階に住み込みで働かせてもらうことになった。

ただ住まわせてもらつてちゃダメだと思い、翔は休みの日にいろいろな会社の面接に行つていたのだが、なかなかいい結果を得られずに現在に至つてしまつている。

「……仕方ないよ。最近は就職難つて言われるんだもん。それにもしダメでも、奈津子さんの喫茶店があるんだし……。……次、頑張ろ?」

「……そうだな。……じゃあ、そろそろ帰ろつか?」

「うん……」

2人が家路につこうとしていると、

「ちょっと、止めてください!……」

何処からか女性の声がした。声のした方を見ると、女子高生が2、3人の不良に囲まれていた。

「へへへ、いいじゃん。遊びうぜ」

「そりだよ。ほんのちょっとだけだって」

「誰か助けて」

少女は困り果て、今にも泣きそうな顔で周りに助けを求めていた。

「ジーマとかでああいう人達を見るけど、ホントにいるんだね。ねえ、翔ちゃん…………ってアレ? 翔ちゃん?」

鈴奈は不良と女子高生を見た後、翔のいる方を見る。だがそこに翔の姿は無く、彼が着ていたスーツの上着と鞄が放り投げてあった。そしてもう一度さつきの男達を見ると、

その時不良達は、怖がつている少女を無理矢理連れていこうとしていた。たが突然、

「グアツ……！！」

「おー、お前らー何やつてんだあーー！」

「あ、？何すんだよこの野郎…うぼお…！」

翔が不良達の1人に殴りかかっていた。そしてそれに気付いたもう1人の顔面に裏拳をきます。

「あつ、今の内に逃げて！！」

「……は…はい！！」

「チイツ、逃がすかよ…！」

翔に呼びかけられた女子高生は言われた通りに逃げようとする。だがそれに気付いた残りの1人が彼女を追いかけ、捕まえてしまつ。

「きやああ…！」

「へへへ、捕まえたぜ……。おい、スー<sup>ツ</sup>野郎…！」いつがどうなつてもいいのかよお…！！！」

男はポケットから折りたたみナイフを取りだし、少女に突き付ける。

「クソツッ！！」

人質を捕られ、注意が逸れた翔を見て、劣勢だった2人が好機とばかりに翔をタ<sup>ツ</sup>殴りにする。

「はつ、動きが急に鈍くなつたなあ、おい…！」

「グハツ！ぐつ、ガハツ…！」

そんな光景を、鈴奈が心配そうな顔で見ていた。

「…………もお、何やつてるのよ～。でも、あたしが行つてもなあ……  
…………どうじよお…………やつぱりあたしが…………！」

鈴奈は翔達の方へ走り出そうとした……その時、

「…………待つてください」

鈴奈は突然後ろから声をかけられた気がした。振り返つてみると、白シャツ、黒のジーンズを着て、天パで黒髪の若い青年が此方を見ていた。青年は翔を指差しながら鈴奈に尋ねる。

「あの、彼のお知り合いの方みたいですけど…………、よろしければ僕が行きましょうか？」

「え？ でも…………」

鈴奈は突然の出来事に、どう答えたらいいか解らなかつた。鈴奈が戸惑つているのを見て、青年は続けた。

「大丈夫です。すぐに終わらせますから」

彼はそつと、身を屈めて静かにナイフを持った男に近づいて行つた。

ナイフを持った男、原田俊也は自分の仲間に殴られている翔を見てほくそ笑んでいた。

「へへへ…。どいつもこいつも、俺に楯突くから悪いんだよ……」

ナイフを突き付けられた女子高生は涙目になつて震えていた。どんなにもがいても、体格の差もあつてビクともしない。

「あの……」

横から急に声をかけられた事でビクッとなつてしまつた原田だが、すぐに冷静になるとナイフを持った右手が掴まれている事に気付いた。掴んだ手を田で巡つていくと、そこには優しそうな青年が立っていた。

「彼女、怖がつてるみたいですよ。離してあげてくれませんか？」

「なつ、何だお前。離しやがれ！！」

原田が手を振りほどこうとしたが、その腕はほとんど動かなかつた。外見は非力に見えるがその力は本物だ。表情はにこやかではいるものの、その目は恐ろしい程の迫力に満ちている。

「離すのは……アナタです……！」

「痛つ……ぐあつ……！」

青年は原田の右手を外側に捻りながらナイフをはたき落とすと、流れれるような動きで女子高生を原田から引き離し、原田を蹴り飛ばして距離を取る。彼は少女の無事を確認すると翔に向かって叫んだ。

「キ!!……」ちはもう大丈夫です……！」

それを聞いた翔は、男達の1人が放ったパンチを左手だけで受け止めると、

「誰だかわかんないですけど、ありがとうございます……！」

掴んだ腕をグイッと引き寄せると、男の顔面に渾身のパンチを放つ。男が倒れるのを見る間もなく、後ろから襲いかかるもう1人に後ろ回し蹴りを打ち込んで卒倒させた。

「さあ、後はアナタだけですよ?」

青年は翔が不良2人を一発Ｋ・Ｏ・させたのを見て、最後に残った原田に問いかける。

原田は思考を巡らせる。…………もう人質に使えそうなヤツはいない。武力行使で突っ込んで行つても、このバカ強い2人に勝てるとはとても思えない…………

「…………チイツ……！」

原田は苦汁をなめたような表情で舌打ちをすると1人で逃げて行つた。翔に倒された2人は完全に伸びてしまつていた。

「…………大丈夫ですか？ 傷だらけですけど…………」

「え？ ああ。まあ、なんとか…………」

伸びていた2人が目を覚まし、原田の逃げた方へ慌てて走つて行つた後、青年は翔に話しかけた。彼の目に先ほどまでの迫力はなく、優しさのこもつた目だった。翔は所々赤く腫れ上がり顔は数ヶ所切れていた。

「僕は氷室彰<sup>ひむろあきひ</sup>とあります。25歳、科学者をやつています」

「科学者…………ですか…………あっ、オレは笹原翔つて言います。20歳で…………フリーーターです」

2人は互いに自己紹介をした。翔はフリーーターと言う事が少し恥ずかしかつたが、彰が何も言及せず、「よろしくお願ひします」と笑顔で言ってくれたのをありがたく思つた。そして翔は彰に質問をした。

「あの…………、どうして助けてくれたんですか？」

「うーん…………、ひとつはキミが大勢でボコられていた事。もうひと

つは、彼がナイフを彼女に突き付けていた事でどうかね。女の子を人質に捕るのは許せませんでしたし……」

彰は横にいる女子高生を指し示しながら答えた。少女はまだ震えてはいるものの、だいぶ落ち着いてきてはいるようだ。

「君、名前は？」

「…………篠原、亜美です……」

篠原亜美は翔の問いに静かに答える。彰が、彼女の連れはないのか、と辺りを見回していると、

「あっ、いたいた！－亜美い－！－！」

「…………愛理ちゃん！！！」

遠くから亜美を呼ぶ声が聞こえ、亜美もその声に応える。愛理という彼女も亜美と同じ制服を着ていた。

「この子のお友達の方ですか？」

「うわっ、イケメン！－…亜美、あんたもしかしてこんなイケメンにナンパされてたの！？…………うわあ、いいなあ～。もつと早く亜美見つければ良かつたなあ～、ああ～ああ～…………」

彰を見た愛理は1人で興奮してしまっている。彰と翔が対応に困っていると、亜美がそんな彼女を現実に引き戻す。

「愛理ちゃん……。この人達はね、私が変な人達に絡まれているの

「え？ そうなの！？ 亜美、大丈夫だった？ 怪我してない？」

「大丈夫ですよ。彼女に怪我はありませんでした」  
愛理が心配そうな顔で亜美に問い合わせるのを見て、彰が代わりに答えた。

「良かつたあ……。ホントにありがとうございました。アタシは西に富愛理しみやえりです。亜美つたらひどい方向音痴で、アタシがついてないと、すぐにどつか行っちゃうんですよ~」

「せうだつたんですか…。亜美サン、次は気を付けて下さ~ね」

「はい、ありがとうございます！」

彰が2人が仲良く帰つて行くのを見送つた後、翔と話の続きをしようと視線を変えた。そこには……、

「もうつ、翔ちゃんのバカ、バカ、ばあかあー（怒）！！！あたしは警察呼ぼうって言おうとしたんだよー？ なんで考え無しに突っ込んで行つちやうのー？ 信じらんないよおー！」

「いやあ、気が付いたら殴つてて……つて痛つ！ ……なんで鈴奈が殴つ……痛いから！ ……仕方がなかつたん……痛いって！ “ごめ……痛いつ……”、“ごめんなさい……”」

彰がさつき話しかけた女性、鈴奈に翔がポカポカと（グーで）殴られ、怒鳴っていた。そんな光景を、彰はただ苦笑いしながら見ているしかなかった……。

所変わつて、翔達のいる場所からかなり離れた路地裏にて……、

賑やかな通りから一本外れているだけなのに、光はほとんど入らず、薄暗く、湿っぽかった。原田はそこで息を切らし、座りこんでいた。

「…………ハア…………、ちくしょう、どいつもこいつも……つかえねえ野郎共だ…………」

一緒にいた2人も翔にやられ、自分は彰にいとも簡単に亜美を奪い返された。正直に言うと、原田はそんな2人が怖くなつて逃げ出したのだ。

「…………ハア…………ハア…………俺はたつた1人で頑張ってきたんだ……。親にも、友達にも、見捨てられて…………、…………それでも強くなつたんだ……俺が最強だ……。俺より強い奴なんか、社会も……人も……何もかもいらねえ！……！」

1人になると、ついつい本音が出てしまう。でも、本当は違うんだ……。ホントは……俺は

『力が欲しくはないか?』

突然、暗がりから声が聞こえてきた。低く、何かでフィルターが掛けたような声だった。

「!...誰だよお...?...誰なんだよお...!...?」

原田は暗がりに向かつて叫んだ。だがその声は、恐怖でうわずっている。

暗がりから聞こえる声は、原田の問いかけには答えなかつたが、更に自分の話を続けた。

『お前は、何もかもいらない、と言つていたな。つまり、全てを壊したい、という事でいいんだな?』

『...壊す? 全てを? 何を言つているんだ、コイツは? そんな事したら...。でも、そんな事が... そんな事が...』

「…………で、出来るのか？そんな事が…………」

『お前が…………それを強く望むのならな…………』

畳つた畠の主は、ゆうべつと原田に近づいて行つた…………。

## 第1話・BEGINNING～科学者ヒロコータ～（後書き）

『ブレイブ』第1話、如何だったでしょうか？自分ではいい感じに出来たんじゃないかと思つてます。感想お待ちしてます。さてさて、次回はやつとライダーが出せる予定です。後、まえがき＆あとがきにちょっとした事をやろつかと思つてます。お楽しみに（^○^）  
ゞーー！

## 第2話・HZDHDGO～骸骨と剣士～（前書き）

「ども、みやびわたるです。」（< ^ >）

今回から、このまえがきのスペースに前回までのあらすじみたいなものを書いていきたいと思います。それではスタート！！！（・ シンボルマーク）

前回までの「仮面ライダーブレイブ」は……、

笹原翔「鈴奈、お前よく平氣でいらっしゃるよなあ……」

旭鈴奈「翔ちゃんが暑がり過ぎなの……」

笹原翔「ぐつ、ガハッ！」

篠原亜美「……誰か……助けて……」

原田俊也「くくく、どこつもこつも、俺に楯突くから悪いんだよ」

氷室彰「彼女、怖がつてんじやないですか？」

そして忍び寄る謎の声……。

? ? ? 「力が欲しいのか…………？」

## 第2話・INDIGO～骸骨と剣士～

彰と鈴奈は傷だらけ（半分くらいは鈴奈のパンチによるもの）の翔を、鈴奈達の家でもある喫茶店「サン・ライズ」に運びこんだ。そこは住宅街の中にあるレトロな外観の店で、店主・旭奈津子あさひなづこが1人で切り盛りしている。

奈津子は鈴奈の母親の姉で、鈴奈が大学進学した時に「距離的にちょうどいい」という理由で住まわせており、翔が住む家がないと言った時も、「ついでに翔くんも住んじゃえば？」と言つて部屋を貸してくれた人なのだ。近所でも、懐の広い姉御的な性格で知られている。

「うわあ……、それにしても、翔くんスゴイ傷だね……。一体何があつたんだい？」

奈津子はすぐに店を閉めた後、翔の傷の手当をしながら鈴奈に事情を聞いていた。

「翔ちゃんが不良に絡まれていた女の子を助けに行って、ちょっとやり過ぎちゃったの……」

「や、やり過ぎたって何だよ？ 追い討ちかけてきたのは鈴な、がぼお……？」

鈴奈は翔が余計な事を言わないよう口を両手で塞ぐ。

「あ、それとね。この人が間に入つて、女の子と翔ちゃんを助けてくれたんだよ？」

「んん～ん！～んん、んんん～ん～ん！～～（違つて！～オレも、  
その子を助けたんだよ！～～）」

鈴奈は彰を指して奈津子に紹介した。口を塞がれたままの翔が必死に訂正するが「ん」という単語にしか聞こえない。

「へえ、やうだつたの…。彰くんだつけ？ 今日はあつがとね」

「いえ、鈴奈サンが助けに行こうとしたので、流石に危ないかなあと思いまして……」

「だつたら尚更だよ。まつたく……、あの2人は小さい頃から仲良かつたんだけどね……。2人共、思つたら一直線な性格でさ。どつちかが怪我して帰つて来るなんてしょっちゅうなんだよ」

彰が奈津子と話している間に、翔が鈴奈の拘束から脱出する。

「……」のヤロ　ふはあつ！　ハア　ハア　……

「あ、ごめん。苦しかつた？」

「鈴奈！～なにも鼻まで塞ぐ！～ないだり！～死ぬかと思つたぞ！？」

「仕方がないじゃん！～さつきは翔ちゃんが…………あれ、何でだつけ？」

「ハア～？」

翔と鈴奈のやり取りを二口一口と見ていた彰は口を開いた。

「では、僕はそろそろ帰りますね」

「ん? もういいのかい?」

「はい。研究所で助手が待つてるので……」

彰は入り口の所に行き、ドアを半分くらい開けた所で立ち止まり、

「あ、そうだ。翔クン、今度時間ができたら、僕の研究所に来てください。見せたい物もありますし。それじゃ、また」

と言つと、軽く会釈して店を出でていった。

「翔ちゃんに見せたい物つて何なんだろうな? ..... って翔ちゃん、大丈夫!?」

翔は鈴奈と云い荒らそつていた時、押し飛ばされた拍子に机の角に顔をぶつけて鼻血を大量に流していた.....。

「.....い、や.....ダメ、...かも、.....」

翔はそのまま仰向けに倒れて氣絶してしまつた。

「サン・ライズ」を出た彰は、ジーンズのポケットから針のついた計器を取りだし、しばらくそれを眺めてポツリと、

「反応が消えている。やはりあの時か……」

そう呟きと、計器をしまいながらスッと体の向きを変えて夜の住宅街を歩いて行つた……。

それから数日が経つた、その日は鈴奈は大学へ行つていて、そして翔は喫茶店で働いていた。今は奈津子が買い物に行つていた為、翔が1人で店番をしていた。

「いやあ、しつかし前のお喧嘩つ早いところは相変わらずだよなあ」

「うわせえよ。それに今回は女の子をだなあ……」

「いやいや、翔っちが喧嘩する理由つていつたら大体が女の子絡みだつたつしょ？」

翔の高校時代からの悪友、馬場隆治<sup>ばばつるじ</sup>がカウンターで「コーヒーを飲みながら翔と話しこんでいた。

「そんなに女の子達にフラグ立つような事してたらさあ、いつか鈴奈ちゃんに愛想尽かされちまうぜ？」

「は？ 鈴奈がどうかしたのかよ？」

隆治はニヤニヤしながらからかうが、翔は相変わらずの鈍感体质を

発揮する。

「（マジ？翔つち、まだ気付いてないのかよ……？）……いや、やっぱ何でもねえや」翔の鈍感さに呆れと懐かしさを感じて、隆治は思わず話題を変える。

「そういえば最近聞いた話なんだけどな……。一応、翔つちの耳にも入れておこうと思つんだ」

「おっ、久しぶりの情報通が来たね？今回は何なんだ？」

隆治は高校時代、仲間内では情報屋で通っていた。その情報収集能力はかなりのレベルに達している。彼のおかげで、翔が退学を免れたという過去もある。

「1Jの数日で、いくつかの建造物が相次いで倒壊してるんだ。被害はまだ小さいし、ほとんど夜に起こってるから、表沙汰にはなっていないけど……。それも爆発とか交通事故とかじゃなくて、何かで切られたような跡なんだって。しかも全ての被害で共通してると来たもんだ」

「…………偶然…………じゃなさそうだな…………」

店内には2人しかおりず、先程と打つて変わつて深刻な雰囲気になつていた。

「たぶんね……。それと、この話を翔つちに話しておこうと思つたのは理由があるんだ。この事件が最初に起きたのは、翔つちが喧嘩した所の近くなんだよ。なんか変わつた物見たり聞いたりしていないかな？と思つた訳よ……」

「……うーん……変わった物か……」

翔は右手人差し指を額に当てて考え始めた。…………あの時、いつもと違っていた事……そんな非日常な事件が起きるようなきっかけ……

「…………いや、特に思い当たる事はないかなあ」

「…………そつか、わかった。じゃあ何か見つけたら、互いに連絡し合いつて事でよろしくな。あ、コーヒーうまかつたぜ。店主さんに比べりゃまだまだだけど……」

「悪かったな、まだまだでよ……」

翔が怒っているのを見て隆治はニッと笑い、コーヒー代をカウンターに置くと、「じゃあな」と言つて店を出ていった。

「…………一応、見ておくか……」

隆治がいなくなつた後で翔は1人考え込んでいた。

時間は昼近くになり、「サン・ライズ」には奈津子が買い物から帰つて来ていた。翔は昼休憩の時間を利用して、先程隆治が言つていた現場を観てまわっていた。

倒壊現場を数ヶ所廻つた翔は一番最後に、3・4日前に自分が大立

回りを演じた場所に来ていた。

「……確かに、此処の近くであつたんだよな……」

辺りを見れば確かにいろいろな所に、切り傷のような跡があつた。だが周囲の人々は気に留める様子もなく、とても此処が今まで見えてきた倒壊現場と関連があるとは思えなかつた。他の場所は規制線が貼つてあつたり、瓦礫が散らばつていたりしていたのにだ……。

「一通り見てみたけど、やっぱ何もないなあ。……そろそろ戻るかな」

翔は喫茶店に帰ろうと歩き出した。その時、

ズガアアアアン！  
きやあああ！  
グウガアアアア！

爆音、悲鳴、雄叫び。それらは翔の背後でぼぼ同じタイミングで、日常に浸っていた繁華街の空気を震わせた。

「な、なんだ！？……つていうおつ！なんなんだアイツは！？」

慌てて振り返った翔の200メートルぐらい先には、黒の体に白いパーティを散りばめた人型の怪物がいた。その姿は人骨のほとんどを外に露出させたミイラのようで、左腕には亀の甲羅ように平たく、ゴツゴツとした盾があり、右腕は人の手の代わりに長く、ギザギザした刃物が生えていた。

『グウウウウウ…………』

怪物は静かに唸りながら此方へ近づいて来た。翔は怪物の顔に視線を移す。頭蓋骨のような仮面の奥には殺氣を帯びた赤く鋭い目がギラギラと妖しく光っている。翔はその目に吸い込まれてしまいそうな感覚に陥り、視線を逸らすのを忘れていた。

「…………はつ！…」

翔がふと我に還り周りを見渡すと、人々が慌てて逃げ惑っていた。会社員も、子連れの母親も、互いを押し退け合いながら、我先にといわんばかりの形相で走つて行く。無理もない。突然の非常事態に落ち着いて行動できる人は少ないだろう。…………そういうしている間にも怪物と翔の距離は縮まっていく。

「や、やばい…。逃げなきゃ、逃げなきゃ……」

翔が走り出そうと足を動かした瞬間、

『グオオオオオオオオ！…！…』

怪物が右腕を降り下ろすと、刃先から衝撃波が飛び出す。衝撃波は走る人々の前方にある外灯に当たり、大爆発を起こした。周囲にいた翔達は四方八方に吹っ飛ばされる。

「ぐつ、うあああーーー！」

翔はかなりの距離を飛ばされ、怪物とは2・3メートルしか離れて

いない場所まで転がった。

『グウウウウ……！』

「く……くそつ……！」

翔はすぐに起き上がりつゝするが、体の至るところを打っているため思うように動けない。怪物がゆっくりと近づき、右腕の刃物を高く構え、翔めがけて力強く降り下ろす。

「チクショウ……、こんな事で死ぬのかよ……」

翔は覚悟を決め、目を強く瞑つた……。

翔はふと不思議に思った。タイミングではもつ当たつているはずなのだが、まったく痛みを感じなかつたのだ。死ぬ直前くらいには流石に痛いだらうと思つていた翔はゆっくりと目を開けた。

だが目の前にあつたのは白い刃ではなく、コバルトブルーの物体だつた。目を強く瞑つっていたせいで視界がボヤけ、物体の姿をすぐに確認する事が出来なかつたのだ。時間がたつにつれ徐々に視界が晴れていき、その全体を見る事が出来た。

そこにいたのは1人の剣士。しかし、姿が普通ではない。「バルトブルーのボディに白いラインが入っていて、ゴツゴツした藍色とライトブルーの鎧が肩、胸部、背中についている。顔はボディと同じくコバルトブルーで、顔面の中央を縦にまつすぐ黒のラインが走り、その左側には「Z」の字を菱形に崩したような目があった。それを鏡会わせにした形の目が反対側についていて、両目共にオレンジ色の光を放っていた。目の下からは2本の白いラインが出ていて体のラインに繋がっている。額には鎧と同じようなカラーーリングの大きな角飾りがあり、そこからサーべルの刀身をイメージさせる角が4本、両目をそれぞれ2本ずつで覆うように下向きに伸びている。腰には藍色のバックルが中央にあるベルトが巻かれていて、彼の顔をイメージさせるロゴが刻み込まれていた。そして右手にはダークブルーと黒の剣が握られている。

翔はそれを、何処かの化学機関が作ったロボットだと思ってしまった。だがボディラインを見る限り、その剣士は成人男性の姿をしている。彼は手に持った剣で怪物の一撃を受け止めていた。黒の柄には白い「Z」を模した模様があり、鍔の部分は無骨な機械になつていて、そこから日本刀のような刀身が飛び出していた。

「…………フツ！…ハツ！」

剣士は剣をおもいつきり振り抜き怪物の腕をはね除け、素早く攻撃の構えをとると、怪物の胸部に3・4発の突きを入れる。

『グガツ！』

怪物は火花を散らしながら5m程吹き飛ばされた。何故生物のような姿の怪物が火花を出すのか翔は不思議に思ったが、今の状況では答えてくれる人がいないのと、全身に激痛が走るせいで、ヨロヨロと黙つて立ち上がる事しか出来なかつた。翔が立ち上がるのを見た

剣士は、左手で翔に「もっと離れるように」という仕草をした。

「え……、あ……はい」

翔が言われた通り剣士から距離をとる。剣士は剣の鍔にあるスロットから縦8センチくらいの青いメモリーカードを引き抜き、代わりに赤い同形のメモリーカードを取りだしてスロットに差し込んだ。

「バーナー……プレスキャン」

電子音が流れると、剣の周りを藍色のノイズが覆い、剣の形が変わつていく。

そしてそのノイズが晴れ、刀身は赤く巨大な両刃に変わった。

怪物はすでに起き上がりついていて、そして右腕の刃の形状を巨大な斧に変化させていた。それを見た彼は鍔の上部にあるトリガーを剣の柄に向けてスライドさせる。

「バーナー……ファイナルスキャン」

再び電子音が流れ、刀身が高熱を帯び、白く発光し始めた。周りの空気が熱気で揺れている。剣士はゆっくりと切っ先を怪物に向かって走り出す。怪物も大声を挙げながら剣士に突進してきた。

「はああああああああ……！」

『グウウアアアアアア！……』

走り出したのはほぼ同時だつた。しかし、攻撃では剣士の方が一瞬早く、怪物を高熱の剣で十字に切り裂く。

『…………グウウウウオオオオオ……』

怪物は火花と炎を纏い、断末魔の叫びを上げて爆散した。

剣士は一息ふうつと息をつくと、翔のいる方に向き直つた。そしてスロットからカードを引き抜くと、ベルトの右腰にある斜めに入ったスリットに鍔の部分を押し込む。ちょうど刀を鞘に納めたような状態になつた剣はピピッという音を鳴らしながら光とノイズに包まれていく。そのノイズは全身を包み込み、ノイズが消えるのと同時に青い装甲がなくなつっていく。完全に装甲が消えると、そこには翔には見覚えのある青年がいた。

「…………つー?…彰さんー?」

黒髪の青年、氷室彰が先程の青い剣士のいた場所で真剣な眼差しをして立つていた。



## 第2話・HZDHDGO～骸骨と剣士～（後書き）

彰「…………ええと、確か此処でよかつたハズですナビ…………。」  
も暗いですね。」

「…………彰君、来たよつだね…………。」

彰「おやっ！」の声は…………。

彰「パアッ……（ 灯りがついた）

彰「うひ、うぶしこーーー。」・△（ ^\_ ^）

みやび「さむせむ～……作者のみやびわたらで～す。」（ ¥ ¥ ）

彰「みやびクン、照明显るす。おまけに絞りこむか。」

みやび「いやあ、初だから張り切りす。」（ ¥ ¥ ）彰  
君、今回からこのあとがきのスペースで「一ノ一」を始めるんだよ。  
（ 暈明の明るさを絞る）

彰「やうでしたね。確か名前が…………」

みやび「ああ……ストップ…………おまけと掛け声があるんだよ。」

『ハーパーハーパー…………。』

彰「……ああ、なるほど。それじゃあこまか。『彰と、』」

みやび「『みやびの、』」

彰・みやび「あとがき、対BANG……。』

みやび「わあ、始まりました、『あとがき、対BANG』。このパナーでは、本編キャラをゲストとして呼んで、読者からの質問に答えてもらったり、どうでもいい雑談とかしょりせり、ヒコヘガハベリした内容でお送りします。」

彰「わいわいしおぎでしょ……。つていつか『対BANG』つてどうこいつ意味なんですか？」

みやび「元々『対バン』は複数のバンドが一緒にライブをするつて意味なんだけど、今回のことゲストが語り合いつつていうのに掛けました。英語にしたのは海苔です……。」イヒーイ（ ）￥

彰「ノリの字が違いますよ？なんで海苔なんですか？もしかして食べたいんですか？パリッパリのを食べたいんですか？」

みやび「わいわい、いきなりシッハリの応酬がきた！……」（ ）

彰「……なんか、わやんとしたシッハリ役が欲しいですね。僕とみやびクンじやテンションに差ができます。それに疲れますし……。

「

みやび「じゃあ、彰君の助手の人を連れてきてよ。その人ならいい  
シッコ!! できると思つしね。」

彰「ちやつかり次回予告になつてゐるんですけど……。まあ、わかり  
ました。次回は連れてきます。」

みやび「よーし、決まりだな。おつと、そろそろお別れの時間だあ。  
『あとがき』対BANGでは、皆さんの感想をお待ちしてます!」

「…」

彰「いやいや、基本的には『ブレイヴ』の感想ですよー? 対バンは  
つこでですかー?」 ? ( )

みやび「それではまた次回、お楽しみに~。」 → ( ^ ^ ) /

### 第3話・NEGATIAR～兵器ヒメモニー（前編）

ええと、みやびわたるで！」やれこおすゞ（ ） ッ

更新する日をちやんと決めてから、執筆に意外と余裕ができました  
( = = . ) ッ

なにせ学業との両立、一番最初はてんてこ舞いでした……（  
× × ） -

止まらないよ、つい踏ん張りまくる今日の頃です……。それでは第  
3話、スタート……（・・・）

前回までの『仮面ライダーブレイヴ』は……、

鈴奈「この人が助けてくれたんだよ？」

奈津子「彰君だっけ？ 今日はありがとね」

彰「翔くん、今度僕の研究所に来てください。見せたい物もありますし……」

ある日、翔達と出会った謎の青年、氷室彰。

隆治「この数日、いくつかの建造物が相次いで倒壊してるんだ。それも、何かで切られた跡なんだって」

怪物『グウウガアアア！！！』

翔「チクショウ……、こんな事で死ぬのかよ…………」

? ? 『…………フツ！！…………ハツ！！』

翔の目の前に突如現れたドクロの怪物と、青い剣士…………

「バーナー…………ファイナルスキャン」

? ? 『はあああああああ…………』

怪物『グウウアアアアア！！！』

怪物を倒した剣士の正体は…………、

翔「…………つ！？…………彰さん！？」

### 第3話・NEGATIARS～兵器とメモリー～

とある場所に古い平屋がある。時代に取り残された化け屋敷のような外觀は、何処か近寄り難いという雰囲気を醸し出していた。しかし巷では、「4・5年前からあの家に若い男女の幽霊が出る。白衣を来た2人の人影が出入りしている」などといった噂が出回っているという。

「まあ、そういうた噂が流れるのは仕方がありません。厳密に言つて不法侵入ですし」

「侵入……つていづか違法増築ですよね?これって……」

湿っぽく、所々にポツポツと照明がついている薄暗い通路を、氷室彰と笹原翔は足早に進んでいた。

「ハハハ、違法じゃありませんよ。此処はかつてある機関が合法的に造つていた秘密研究所です。僕はそれを“借りているだけ”です

「だからってボロい平屋の地下をぶち抜かなくとも……」

案外、幽霊とかの正体は意外な物だつたりする。「化け屋敷の幽霊」の噂は、数年前から彰が平屋のある研究所に住み始めた事が原因だったのだ。翔は驚きと呆れで、それ以上何も言う事が出来なかつた。しかもそれ以前に聞きたい事もあつた訳で……。

「…………着きました。此處です」

目の前にあつたのは、何処かの事務所の物を取つて付けたような曇りガラスの扉だつた。鍵はついておらず、研究所という事を考へると防犯面的に非常に無防備である。彰は「大丈夫です」とでも言つようく何食わぬ顔でドアを開けて中に入つて行つた。

「（中もボロかつたりして…………）」

翔が不安がりながらドアをくぐると、そこは先程の湿っぽい通路から想像もつかないほど広く清潔感溢れる空間で、ドラマなどでは見ないような謎の機器がたくさん設置されていた。翔が「オレ、今日は驚きっぱなしだな」などと考へていると、

「よつこそ我が研究所へ。僕は此處で所長をやつてるんですよ……といつても2人しかいないんですけどね。ハハハハ……」

彰はニコニコと満面の笑みを浮かべながら機器の説明を始めた。さながら田舎の子供のようである。

「これは、高性能の地雷除去装置です。対人だらうと対戦車だらうと辺りの地雷を全て見つけ出し、特殊な破壊電波で使用不能にさせらるんです。あとこれが携帯式の緊急用シェルター。一見するとただの分厚い鉄板ですけど、高熱を感じると一瞬で5メートル四方の核シェルターになります。耐熱温度は約5000度。あとこれが……」

「あの～、彰さん？そろそろオレを質問……答えてくれませんか？」

翔は彰の説明を遮つて、話を本題に戻すように促す。それを聞いて我にかえった彰は、申し訳なさそうに頭を搔いた。

「…………すみません。つい夢中になっちゃつて。…………さっきの怪物について…………ですよね…………。…………わかれました。話します」 そう言つと彰は急に真面目な顔になり、フウツと息をついてから、再度口を開いた。

「あの怪物は“ネガティア”と呼ばれています。“センチメントメモリー”に内包された“ファーリウム”を物質化させたクリーチャーです」

「…………え？ ネガティア？…………センチメント？ ファーリ？ なんですか？ それって……」

翔はまつたく聞いた事もない言葉の応酬に困惑してしまった。ネガティアは先程の骸骨の事だという事までは解つた。しかしセンチメントメモリーだのファーリウムだと突然言われても、頭がまつたくついてこれない。頭の上に「？」がたくさん浮かんでいる感じだ。

「…………20年前、奇妙な鉱物が発見されました。その鉱物は不思議な事に、周囲の生物が抱く感情に反応して形状や性質を変えるという力があつたんです。科学者達はこの鉱物を“ファーリウム”と名付け、世界中の科学者が科学の進歩のためにこぞつて研究を始めました。“感情に反応して形を変えるなら、それを意のままに操れねばどうなるのか”ってね。」

「感情で形を変える……ですか……」

「はい。その研究は見事成功し、“世界中の様々な情報を感情だけで物質化する技術”ができたんです。すぐさま実用化に向けて開発が進んでいきました。が、やがてそれを“兵器”として使おうとしたグループが現れました。そういう思想の拡大を防ぐために世界で行われていた研究のほとんどがストップされました。そして今から10年前、そのグループが再び研究を始めたという噂が研究者の間で流れたんです。」

彰はおもむろに懐から藍色のメモリーカードを取り出し、それを翔に見せた。

「これがセンチメントメモリー。先程話した技術を応用して、戦闘装甲を物質化させる物です。いずれ完成するであろう“兵器”に対抗するために作られたんですよ。」

「それってさっきの…………って事はネガティアってその“兵器”の事なんですか？」

翔の問いに、彰は首を縦に振った。

「正確に言つとネガティアは、“兵器”を他の者が強奪して、更に改良した物です。“兵器”的技術を考案した科学者グループは、研究を再開して数年後に全員殺されたそうです……。そんな事もあって、今では科学者の世界でフイーリウムといえば、戦略的な道具としか扱われなくなってしまっています。最初は文化を進歩させる希望の光なんて呼ばれていたのに、“兵器”だなんて……」

そう言う彰は、やりきれないといった表情をしていた。フイーリウムを戦いに利用しようとした事も許しがたいが、それを利用するためだけに人の命を奪える者達はもつと許せないのだろう。

「…………フイーリウムは、世間的にはあまり知られていません……。世界でも一部の人間しかその存在を知らない…………。それが事態を更に悪化させてしまっているんです…………。一般人に知識がない事を利用して、ネガティアという“兵器”で罪のない人達をたくさん傷つけている…………！作った動機なんて関係ない…………僕は…………ネガティアを作り出した人達を絶対に許さない！！この手で必ず見つけ出す！！！」

息を荒くする彰に先程までの余裕はなく、拳を側にあつた机に叩きつけていた。歯をギッと食い縛り、全身から湯気が出るのではないとかという程の圧気を放つ彰に、翔は圧倒されていた。そこまで怒りを露にするなんて、この人の過去に一体何があつたのだろうか。翔はそう聞こうして、すぐに言葉を飲み込んだ。これ以上、赤の他人である自分が踏み込むべきじやない、と…………。しばらくの沈黙…………。そして落ち着きを取り戻した彰が口を開いた。

「…………はあ…………すみません。熱くなつてしまつて…………。とにかく…………キミを此処に呼んだのは、キミにある提案をしたかったからなんです」

「提案？なんですか？」

「はい。…………実はキミに…………」

彰が何かを言いかけた時、突然、部屋中にサイレンが鳴り響いた。

彰は近くにあつたマイクに駆け寄り、無線の向こうにいる誰かと話し始めた。

「優里チャンですね……はい……何処ですか?……」 檜実公園  
「わかりました。すぐに向かいます」マイクのスイッチを切つた彰はサッと振り返り、翔の所まで走つてくる。

「翔くん、この話はまた後でお話しします。繁華街の時のネガティアがまた現れたみたいなので……。僕は現場に向かいますので、キミは此処で待つて下さい」

「繁華街のヤツって、彰さんがやつつけたんじゃ……」

「いえ、本来ネガティアの完全態は、人間がフイーリウムでできた鎧を纏つて生まれます。鎧をより強固な物にするため、作動してしばらくは鎧のみが独立して行動し、暴れまわつて鎧の能力を高めていきます。そして鎧の強化が終わつた所で人間に融合、完全態になるんです。鎧はただのエネルギー体なので、たとえ破壊しても再び何処かで復活してしまうんです。これを止める方法は、所有者の持つてゐるネガティア用のメモリーを破壊する事、それだけなんですよ……」

鎧を破壊してもその存在が消える訳ではなく、更に強化された鎧と戦う事になる。つまり、一体のネガティアを倒すのに、運が悪ければ何回も戦わなければならないのだ。あまりに現実離れした彰の言葉を、翔は何とか理解する。実際にこの目で見てゐる事もあつて、さつきよりは飲み込みが早かつた。

「とにかく、翔くんは一度ヤツに顔を見られてます。申し訳ありませんが、僕が戻つて来るまで此処で待機してて下さい。いいですね

「……」

「あ、ちよ……ちよつと……」

翔の返事を聞く間もなく、彰は猛スピードで部屋を出ていつてしまい、気がつけば翔だけがポツンと取り残されていた……。

研究所を飛び出し、公園にダッシュで向かっていた彰はふと考えていた。翔に提案しようとしていた内容は、本来の彰自身の考えとは正反対の物だつた。本当ならそんな事はしたくない。だが最近は、そんな我が儘を言つていられる状況ではなくなつてしまつているのも事実……。

「…………ああ、ダメだ!! 今はネガティアに集中しなければ……

…………」

桜実公園は大きな噴水があり、近所の住民にとって憩いの場になっている。そんな場所で暴れられれば、大惨事になりかねない。それだけは阻止しなければならない……。そして彰が公園についてた時は既に怒号が響き渡つていた。

「グゴオオアアアー!!」

骸骨を身に纏つたような怪物、ネガティアは辺り構わず暴れまわつ

ていた。幸いにも人はいないようだ。彰は持っていたダークブルーの剣をかざして、ネガティアに向かつて叫ぶ。

「破壊のフィーリウム、『スケルトン・ネガティア』！！アナタの鎧、破壊します！！！」

彰は剣を右腰に当てがつた。すると機械から帶が飛び出し、腰を一周して鎧の部分に力チャリとはまる。そして藍色のセンチメントメモリーを取り出して鎧の側面のスロットに差し込んだ。

「ゼントル……スタンバイ」

電子音に続いて剣からは、ブウウン、ブウウンというバイクを吹かしたような音が鳴り始め、徐々にそのテンポを上げていく。音がブンブンブンというテンポにまでなつた所で、彰は右手で剣の柄を握りしめ、再び叫んだ。

「…………変身…………」

「ゼントル……セットアップ」

ベルトから剣を勢いよく引き抜き、頭の上に高々と掲げた。電子音が流れ、引き抜いた時に発生した青白い光が彰の体全体を包み込んでいく。そして包み込んでいた光が弾け消えた時、彰はその姿を変えていた。「バートと白のボディ、ダークブルーのアーマー、顔面を覆い隠すような角飾り。そして「Z」を模したオレンジ色に光る複眼と逆手で持ったダークブルーの片刃剣……。

「“カラードライダーギア・ゼントル”。完全態になんかさせはない。必ずアナタを破壊します！！！」

ゼントルは片刃剣、“ゼントルドライバー”を素早く順手に持ち変え、スケルトン・ネガティアに突進して行く。スケルトン・ネガティアも右腕を大きなサーベルに変え、ゼントルの攻撃を迎え撃つた。そしてそんな光景を、影からじっと眺める者がいた。

「いいじゃねえか…………面白え……面白えよ…………さて…………そろそろいくかな…………」

### 第3話・NEGATHAR～兵器ヒメモニー（後編）

彰「…………」

みやび「ん？」

彰「…………」

みやび「彰君へどいたの？ 黙りじゃなくて……」

彰「みやびくん、…………どうしてボクの助手の子が来てないんですか？ 僕はちゃんと呼んだハズですけど…………」

みやび「あ…………それは…………その…………用事が…………出来た…………う…………」 段々声が小さくなる

彰「まさか…………話の流れとかの理由で今回の話に出せなかつたから、わざとあとがきにも出せなかつたんだよ…………」

みやび「い、…………（完全図鑑）。…………そ…………それでは始めるといふか…………」 みやびと、『――』（、、、）

彰「へへ…………。話を返された…………まあいいか、『彰の、』『

彰＆みやび「『あとがき対BANZAI』――」

みやび「わあ、今回の本編では新しい用語が出てきたね？」

彰「ですね。なので今回の対BANGはその用語解説をしたいと思います」

みやび「今日は“センチメントメモリー”と“ファーリウム”についてです。今のところ、彰君が変身するための青いメモリーと、炎を出す赤いメモリーの2枚が登場してるね」

彰「本編でも語られていたように、生物の感情を吸収して形状や性質を変える“ファーリウム”という鉱物でできています。内包された情報を引き出して、それに準ずる姿に変える事が出来る、近未来物質です。“ネガティア”も同じ要領でできているんですよ。ネガティアの場合は、ファーリウムが情報に準じた形に変化した動く鎧になるんです。そこに人間が融合されて“ネガティア・完全態”に変化し」

みやび「あー、要は仮面ライダー特有の、敵同士で同じツールを使うってパターンだね」キラン（ ）

彰「そこー！作者だからってメタ発言はしないで下さいー！あと話被せないでー！」？（。。・）

みやび「いやあ、彰君の話長いからさあー。尺の関係でね……」

彰「随分変な所でカットしましたね……」ブー（ ）

彰「ところで、前回で登場した剣士（彰）の名前、ついに出てきましたね。“カラードギア・ゼントル”。表記は“ゼントル”つてなつてましたけど……」

みやび「まだスペックは語れないけど、近々キャラ紹介の回を書くつもりだよ。タイトルに書いてある“仮面ライダーブレイブ”もうすぐ出でてるしね。」

彰「次回は助手の子は出でるんですよね？」ギラッ（ ）

みやび「う、視線が殺氣を帯びている…。だ、出しますよ。…それではまた次回～」ヒヤヒヤ（^ ^;）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8010x/>

---

仮面ライダーブレイヴ

2011年11月17日19時14分発行